

# 「ため口」ではなく「平等語」と呼ぶべきか？

秋田学習センター客員教授 立花 希一



「ため口」は、否定的な意味を伴う軽蔑語 (pejorative word) のようだ。「ため」は対等、同じという意味なのだが、さいころの同じ目を意味する博打言葉が語源だからかもしれない。例えば、年少者 A が年長者 B に対して同年齢の友だちと話すような口ぶりで話した場合、A は B にため口を使ったと非難される。このような価値判断が当然視されるのは、「長幼の序」の儒教的伝統の影響が残っているからであろう。中根千枝は、古典的名著『タテ社会の人間関係』(講談社現代新書 1967 年) で、日本社会の人間関係の特徴として、相手の年齢、地位、階級等を確認あるいは推量し、上下関係を見極めたうえで、話し方を決めてコミュニケーションを図ろうとする傾向を指摘した。

しかし、コミュニケーションの価値は、話し方というより話の中身によって決まるのではないか。だとすれば、単にため口だからという理由だけで、そのひとの話を無視するのは賢明ではない。むしろ、お互いに話の内容に耳を傾け、もしその話に価値ある内容が含まれていればそれを受け容れるような対応をするほうが、コミュニケーションは実り豊かになるはずである。

否定的な意味をもつ「ため口」ではなく、それと同じ事態を表現する言葉として「平等語」を用いたらどうなるだろうか？ 人権はきわめて重要な価値だが、個々人の自由と平等の尊重がその核である。「平等語」となれば、肯定的な意味を担うようになり、逆に、尊重されるようになるかもしれない。

敬語のなかの尊敬語や謙譲語は、儒教倫理や封建的な身分制の残滓である上下の序列を意識

させ、それを固定化させる機能を果たすので、「平等語 (ため口)」とは衝突する。丁寧語も敬語だが、尊敬語や謙譲語とは異なり、平等な横の関係においても通用する。目上・目下に関係なく、お互いの人格を尊重するならば、自ずと丁寧な言葉になるはずだ。友だち同士でも、口汚いぞんざいな話し方は望ましくないだろう。

老若男女を問わず、個々人を平等に扱い、互いに尊重し合いながら自由闊達で有意義なコミュニケーションを図るための手段として、明瞭かつ丁寧な「平等語 (ため口)」は、不可欠ではないだろうか。

すでに明治時代において、「平等語 (ため口)」を奨励したとされる人物に中江兆民 (1847-1901 年) がいる。兆民の開設した「仏学塾」では、兆民と塾生は対等の言葉を使って自由に議論していたという (松永昌三『中江兆民』柏書房 1967 年)。万人は個として自由かつ平等であるという兆民の信条から生まれた慣行であろう。「東洋のルソー」と呼ばれる所以である。

因みに、ソクラテスは誰とでも議論を行ったが、その中には、プラトンなど多くの若者もいた。プラトンの作品によるソクラテスと若者の対話では、互いに丁寧に明瞭な言葉が使われているが、当然、尊敬語や謙譲語は使用されていない (ところが、岩波の『プラトン全集』では、まるで日本人同士の会話のように、年少者はソクラテスに敬語で話している。翻訳でも、古代アテネにおけるかれらの実際の対話をいきいきと再現する工夫がなされてしかるべきかもしれない)。

